東海道駅路之絵

ル 3
1214
1

東海道五十三次

一

品川　川崎　神奈川　程ヶ谷
戸塚　藤沢　平塚　大磯
小田原
箱根の旅人　二十丁目
新田大明神の調　六十丁目
富士の人穴実説　十丁目
沼津の東海道見附の事　十六丁目
蒲原の駅地虚實　十四丁目

全五冊

一

ル部
1214

驛路の鈴巻一

久堅の空をもれる君が代の千代よろづ代に松が
枝をならさぬ八嶋の外まで治る周公文武の守し他
延喜天暦の聖代とても今此時にはまさるまじ爰に若男
久しく江戸に住しかど故郷の方なつかしくなりふ
思ひ立旅心なりし比春日の鶴まで芝の方へと趣く
爰にも又年の頃四十計の法師装包を首よりかけ脚半
草鞋をはきしもの是を振分にしてもち男立なりく

門 昭3
編 1214
巻 1-5

十六番

櫻井氏

順和藏書

順和藏書

驛路乃鈴卷一

久堅の雲の上なる君代乃民すやらよに松の色を
校とゝ[illegible]八嶋乃外まで治る周公文武の御世
延喜天暦乃聖代とゝ今の世ゝ[illegible]色よ武男
久しきを世乃人は[illegible]しかど故郷乃方なつかしく
思ひ[illegible]旅心なる紀春日乃[illegible]まぶき芝乃方へと急く
なゝ[illegible]文年の頃四十余乃法師裝包と有ける所す
[illegible]難思[illegible]と[illegible]男[illegible]

御廣ハ何方へと問給ふに答ていはく男
女ハ上方の者にて候ひしが久しく住居なれ郷へ帰り作法
さてしいまだ道連なしいざ伴ひ申候ものなり
墨染の姿にて長うして髭細しと申候ハ武藏野
の辺にて名を風地と申候ものなりさてかの
長うして今日わすれ難き男ぶりにて幸の幸うを我れも
旅の人と思ふ者なれども美味なくして御座とひえよ
ものとてもいん易ひく常時御座に居ぬ

戸さゝねの代の世ハ我れ一人場をさげざるをぶ
指ぬ身の野の山を歩くこゝ人屋ゝ成わるこそ
あり難をれ某も武道中とひく住居しる方私ハ
より御ゝと村星やと泊めく人ハ相後又ハ方双鍬か
やとも乃て見て道とかゝるわ申ハかゝくまゝ
見してハ道くゝ眠さ海しみ見て寄る行ち後ゝ
伴ゝくを御ゝ乃称作へ男色ハ寃竟乃今ハ出会て伴先洲
やうゝまる沢宿くゝと定め住ゝ形方見事ハ洲の浦ち

う始め給ふ風俗是ハ神武天皇十五代神功皇后五十年
庚午乃春二月宮ヲ造て仏教ハ本邦ニ来ル始てひや
ひやくさいハ人皇四十三代元明天皇の御宇和銅六年ニ始
て木曽路と開きてうしろみるかぎりをたくるハいつるいろ
あをしなり春ハ驛路乃於とて勅使ハ国へ新羅ノ時賜ハ
て分て也此於と分てるるを皇恵ニ倣ふと関乃戸を
ひらきて通ひけるとこそ聞ハ今ハたくりるみる分る道
といふうちよ宇多川橋ニ倣ふく男ハ橋と宇多川橋とは

何ぞ分や風俗ハ人皇百三代後花園院乃御治世藤
軍義政ハ御時享徳ハ治ふ藤
理左史宣政乃家臣左田伯中ル資長入ル道灌と云人始
ふる給ふ長禄元年丁巳四月八日道灌江戸ニ始ふ
始ル川ハ宇多川和泉ル長清ル云人住ル此人屋敷ハ
きんくてる梅ニ武ハ右ハ小山中ハ左ハ海上湯くゆして
安房上総乃ちを山脈くとして際と云ふ海乃上ニ
ふ国ル浪ハ寄くかくやうに岩石山ル多ル人

若狭乃花やう湖水乃波ろひしと書給ふもか
うなきしよりや西行ん近き比雅人乃氏和てやのくと
朔月乃こゑ出しよ西行乃もとをしこ
うみとりやゝ乃猟こて出海月乃
入こもゝとひこゝ路ゝ
と徐しひしとゝん
小河驛月ゝ橋より行程二里町乃入口左ゝ方ゝ稲荷乃
小祠あり町ゝ西右ゝ方ゝ東海道ゝ其上ゝ方ゝ殿山町

とおて右の方ゝ池上本門寺乃堂乃入口。行程七里余
○秋乃森八幡ゝ社ゝ西ゝ方ゝ小川ゝ其ゝ海道小家ゝ紀猟
師町ゝ云ふ者ゝ多ゝ芝ゝ芝者ゝ云なり
○蒲田村。六郷村右の方ゝ稲毛ゝ云ふ郷乃出口ゝ行方
弾正明連ゝ云人居住し稲毛ゝ田畑ゝ多ゝ之房橋山
武蔵弘成の林ゝ多ゝ之朔ゝ弾正乃墓ゝ立しゝ云
○六郷ゝ橋ゝ間此水上八王寺多摩川ゝ同流也ゝ渡中古橋乃
上ゝ左乃方ゝ道あるゝ右ゝ遠ゝ大師河原ゝ道ゝ書ふ男

わ也ハ河大師とや風也河ち道と里余行ハ里わち弘法大師の
像ある寺よ大師河ホと云ふ橋乃ち河上と矢口ち渡つとく云
其ホ新田大明神乃社也ハ新田左ち源腎義真ち霊
と崇ト也其故ハ新田義貞ち御みよ義真そて器量ち者
ち勝也智謀武器乃者ち將也し義貞討死の後を為かしと
ち合戦也しく年勢あして勝利と仕給て上野国よ
歸ち給しく武蔵也ち逃ちく藤倉と称ちし藤倉ち
藤倉管領ち利基氏いちち楽伐討むと藤しの人ち

且ちく左所と定めと基氏ひそ小竹沢右京亮と招ちく竹
て討へさうしと云それちう竹沢ち藤倉と背ちし戦
伐ちて義真よ同表とされしも義真ち竹沢ち深会と結ち
心とゆるし給ち竹沢藤と云ひく京都ち何乃ちわる者とやの
御恩女十七よなりしせゆひ密敵ひ中なをやトし義
真ち半そて ま伐るさとち小義真を名小ちまうしひなれ
ハ偽老同死乃契つと懐ち藤竹沢心毒二乃時方ち拒ひ
つさ給小御運乃程ちそかしし生ちて竹沢ハ海くち

方便をもつてはかりごとを設けて人をたぶらかすべしとも
云へるゆへにて江戸をはなれると雪ふる人義興の御方
へ成程と保をめぐらし延元三年九月さうあるの矢口の
渡つよめくに舟の座をうち殿金をさし河中にて鑿をぬ
き舟を沉めうち御供は佐ひゝ井彈正義興と中よりと
上ゝ迄八人目年一の不道りのよ忠めうに惜さうく牙とう自
害して座のうへにはとなる御入江戸竹沢左ゑ恩賞を蒙
る渡江戸をはるか四よ帰京して代矢口の渡迄よ到る

時よ義興の霊あらく迄ハ為供をひくも紛るくんしく
それより重病をうけ水よ溺るゝ様にして江よ沈ひ死
あて死りる色うち海色をあらくあやしき事ともあるし
ゆへ不ものの小祠を建く彰田大明神とやや
河橋驛武川より二里半○市場村○露見村露見河橋を
大名一ゝ座江戸入をて先を持る道具牽馬鞍皆具を
座ひやふ供の人をとゝにむまてをやき白く剃さて衣類
とわらさめけくめを渡ふ

忠なる二人ともに道の傳ありて見物と男のかやうきそ
きそ人ゆゑに合別の果報ともあまたが所夢く愛衛おも
さ為も何るに我をなすくる過去の業たすひ願しきらさそ
世に厚く風也なて佛ハさうる事なまでも其徒と法も尓
取と一心のかさぬよわらんへし其方我ともなく草紗とは
かし處るに無て行人をみんまいうしやまましく如むに至り
やまも絶りにるみそてうち業しる當座ハわうらく
居くれたまへともこのち處をいてさむゆへ家老様宗も文家老

ハいうに筋くなまでも眠の法さそてんをは仙影のなし様を
まうさ聖る籠と望む世を皆がくのさくるさとも賤しきも
のそくにハ法をさぬのゆへくふて中の道を事おする止限さん
世ハわがうち無量の聖線のなきん事徒ふかるへし蝉丸
の前よ
世もん中ハ久そてえかくてまをわりのなし
そへてもそうしやをもうてしかけまハ
文唐もは臂を曲て枕として其のしうちに人をわか

彈冠新卷一
七

うちさしそたるしるし
ゐはしり　山鬼し　百足し　蛇し　ものわひてさるく
れ抜しわのはめてし　百足ナるハ我ホ百れ足さ
歩むしゝ　自分乃用れ命ハ自由ハ面し後ゑ山鬼
乃足一本あるくも事ゑる不思議也山鬼ゆてされハ
ゑ方百の足ゆそも自分れ用ゑ命ハ生ゑと我ハ一足ホ
ても事かゝ不後分し　ゑれハゑ方足の多ゑも是ホし
九十九ホとゑゑ一本よなら後へゝ云蛇ゆゑ

山鬼れ一足と百足乃百のわしを皆是ホし　我ハ足もホ
く腰めてゆくゝゝ山後平地ハ中よゆゝと木の
間を河ゑら何ホそを不自由なる事ホしホま中
乃足ハむつし　ゑにとの〳〵腰めくゑら後へゝ
○かまむさ村○こやと村○彩宿乃海道よ面ゆゑ
と本牧乃十二天の森と云れ沖と本牧乃沖そ後海れ
舟風ゑとれハ風波乃難よ遭ゑ云
神奈河驛河後ゑ二里ホ河後ゑ乃事ゑ

体長くして石山より多賀ハいくつ
非ずや風色ものすごく神奈河乃橋孤山と云中古ハ
河の東塚と稱へて永正七年庚午七月十日上杉治部
大輔氏憲入道蓮芳の家臣上田義人政盛と云者小
泉早雲と壹〻山より橋の竜ヲ伏く上杉蓮芳并
ニ成田中務亟長康同下総ヲ長氏沼江源次郎頭祐義
田尻妻丸大石源右衛門定久矢野安藤入道等能登ヲ
攻る所ニ人防戦甲ヲ〻同廿九日城と同ク落りるく

ヲく此所とおて紀八右八海多在ハ仏山多ヲ山乃岸り
小ヲ穴あり活連とひきて山伏吉傍ヲ拓て湯校志
とくく〻く振て見ヲ富士ヲ人穴と云男女ハ彼
仁田原乃寛遠と凡紀ヲ穴ヲ中云風色ヲて〻ヲ生ヲ
賛つ〻へ〻遠仁二年六月二日源朝家郷藤河ヲ安
士郎の将金ヲ多つ紀ヲ其羅ヲ大なる穴あるヲ見て
人穴と云其所と宛乃ひとして仁田四郎忠吉ヲ勅状
賜て多従六人此穴ヲ入家所有己の刻忠常人穴ヲ

出家仕度一日一夜也此洞穴トて踵を廻らす事自由ら
ら直ち進行又暗き中く進ミ〻て〻て後ハ明るとなる
水流ありて〻くと漫〻と蜿蜒く流れ〻て長き事
遠ち大河のみて逆浪激ち流れんとする処を渡り
乃光ち富く河向ち恢き心ち人民命迫ち人命を死を
忠ち八彼霊乃刻へ〻ち〻て剣ち〻ち河ち投合く食事を
ち〻く帰ふ〻〻云ち八富士郡上井村ち二里余少り
人穴と云ち事あり大なる穴あり仁田四郎の

入る穴ち見たり近ち近ち洞乃人穴ち入ち
得ち〻ち〻ち八廣野の内ち穴あり松明と称く内ち入
見ち八四方皆巌石ち〻ち冷清く寒ち感ち
ち二三町乃程八穴廣〻て滝水跳躍ち為ち〻ち奥
八穴狭〻て入ち事叶ハ〻ち
稲荷驛神奈河ち三里惟子宿中三郷合て一
宿ち〻て水流乃辻惟子宿ち出八小条氏康ち妹聟長良
左衛門佐義門と云人岳仏と大梅山城ち康忠ち見関

加賀ヶ瀬・御幼豊・有馬・秦野等皆信濃乃旅下也

○中村　下野坂渉所武引相模乃境也○吉田村

戸塚驛程去ること二里余ありて相模乃国ハ

なりぬ極る所小倉沢への庚申塚として持佛堂見成

侍りてうら糸あるゝ易やと行行よ○八幡町山西と戸

塚乃堂と云○原宿山を過て大谷沢まて九丁余ハ松乃

左右ハ人家四軒あるく人ゆる男わゝハ行の先

と同なる茶屋あるとして松平右衛門尉正綱の領国

有る隆綱乃子孫玉縄ゆくゝ男女ハ見も聞合乃四

とて右の方九町盛長乃屋敷乃跡乃風地ありて

往来作く同なるの西耳縄明神乃前東南方乃

あるとゝ極る玉縄村ハ山の内乃あり文字異ありて

刻ひとしなる所人あやまるゝ

藤澤駅戸塚より二里四丁を山乃麓よりゝ道ハ宿と

侍りて入地茶屋入ゆるハ家を和てよと山ん物ゝうと

しりる風地云ゝハ當所ハ永禄乃法小巣方大谷治部

右馬ノ允嘉ノ云人居給ヒ男あるしよ向く先よ住宿よ
入ル右の方よ寺を建る義乃名よ寺乃名ハ極楽上人
乃寺也社内よ小栗丸家人ち墓ア云ハ彼冠師小
かくる小栗原ちくへいなく實説ハそひやあるし美
東よハ伯人くし怪なる事ハ春戸さねせいくあるしもの死
後ハ作ると云風也ちれいある事なしとも院
御しくハ不考りい人皇百二代称光院乃御宇征夷将軍
源義量卿乃時應永三十年癸卯ちの常陸

国乃住人小栗孫四郎平満重と云者謀叛と紀し
結城乃下知と背き左衛督源持氏樂と退治乃を
ぬ結城と出結城乃城よ到ル八月二日より小栗乃城を
攻ル小栗ハ軍兵と城乃ハ防ぎ戦ひ
ハ結城ハ一族左近将監木戸内近助と先ハ大
将ハ吉見伊豫守上杉乃帰荒ハ責を
ハ防戦ハ小栗ハ方ハ伝家乃婿よ三別
よ出と云ハ小次郎ハ思ひて関東よあるまるる

桐別樹況堂と云ふよりくぶの長屋の強盗やうも
集つまりける家とうる家を強盗と集て云ふるハ
浙江人ハ常別有徒乃人ハ酒乃窖へ
討殺して取へきうと後合と云ふうち佐人ハ
いくせんと云一人ハ盗さわ〳〵ハ酒と毒と入て呑せて
殺せと云世俗ハ同意し家乃極女性集ゆ
酒高と初め彼小栗と強乃神よりそふ〳〵酒と
すゑんける物よ立寄する姫と云極女酒る小栗よ
ハ

別しうの事ハ知常ゆ小栗よひそうふ岩
しゆ小栗んはて呑やうふ呑ふ呑と家
人ハ小栗ハ彼ハ彼神よ出る神
やて産とうち近乃林ハ同よ行て人ハ廉毛なる
るとと繋て置うち見ハ盗人付来乃大石のるとと盗て
来りれもあるすて人と哈ふハ盗人とも全方ふ
くて浙林乃内よ行ふ盗ハ小栗見と人て西ひや
ふ立帰て彼家ふく取持て彼るよ行家報と揚く

小栗重成乃子孫ハ行時乃召小姿沢乃道場へ家
行上人と称奉る上人義と時衆二人附て三別へ行く
つゝる彼毒酒と者ゝ家人共ハ拾女ハ辞依る
と盗人ゝ共ハ元ゝ山ゝ穴窟と奔ひ走
ゝ分部と照姫ハ山ゝ居ゝ河下ゝ遠
ゝ山ゝ居ゝ小栗三別ゝ来ル照姫
ゝ孫ゝ捜ゝ探ゝ盗人共を探ゝ
ゝ孫代ゝ三別ゝ世ゝ照天姫ゝ三代

照姫乃事ゝ又小栗兼氏ゝ云小栗乃系図ゝ
ゝ孫五郎平満重其子小沢郎助重ゝ人共
ゝ伝ル者ゝ是ハ二人ゝ一睡ゝ
ゝ雲ゝ明ゝ云義沢ゝ出ル風ゝ
ゝ孫ゝ子ゝ月ゝ
ゝ明ゝ乃ゝ山乃ゝ
ゝ云男ゝ
ゝ月ゝ
ゝ笑ゝ行ゝ
ゝ白鷺山ゝ南郷ゝ

たゝ海中ゝ江の橋人ゆゝ男女の橋ハ三ツ海と称す
しゝ盆山ゆ河ゝ法ゝ出来きん風也わ也八大望
三十代欽明天皇十三年壬申四月十二日ゝ廿六日と
大地震動ゝく天女雲ゝよゝわゝる音海中ゝひく
川ゝ橋ゆ現ゝ見ゝ江ゝ橋ゝく云ゝ天女ゝ天ゝ
位ゝ付ゝ湖ゝ乃悪龍天女ゝ乃ゝ上ゝ紀御ゝ
乃ゝく天女の御ゝ出ゝ我ゝ乞ゝ也ゝ
ゝそうゝ也ゝ云天女ハたゝひゝゝる事ゝ

つゝ乃紀ゝ天ゝ我ゝ乃ゝ殺ゝ
ゝ命ゝ影ゝ速ゝ事ゝ
悪龍ゝ
我天女乃御ゝ
と剣ゝ
女婦ゝ
ゝ弘法也
弁才天乃ゝ

弁才天と勧修と法印尭恵

ちゝはゝと御ものかたり給へ

老ぬ人なれやまさしこの事

又は嵩乃らちり児う渕として不わりもし走

長寺の廣徳菴に自休義とて法わり

り後奥州志信乃人に御く百日籠りて笑言申

桐兼院乃白菊と云児を御人来給と自休仰ら

合會をして乃り報寺より帰りを待あやまく為の知おひ

丹いよりして西ひ垂へきを使と云やまとも白菊を障

ある事なるまハつよまりせぬ世乃ありひ今ハまりく乃西

事ハ先ハ乃り自休ハ為やまし為ら意為よわるひく

けりとして玉乃とを為るはゝ為ハ為ぬくおそし

ゝ事ハ云わゝ為ハ白菊も世んゝ為ぬくやおりんん

式部まゝれおて又御為へ行為よ為と書て波寺と為

義と為りへわゝへ凡せよゝそかくゝん

ちゝ菊と為の乃里れへ人ゝゝ

[illegible]入江[illegible]

[illegible]

[illegible]事とれたひ入江[illegible]

[illegible]ひ命ハ[illegible]

[illegible]て[illegible]と投[illegible]自体[illegible]て山[illegible]

[illegible]池と消[illegible]

[illegible]

懸崖嶮處　捨生涯　十有餘霜在刹那

花質紅顔碎岩石　嫩眉翠黛接塵沙
衣襟只湿千行涙　扇子空留二首歌
相對無言愁思切　暮鐘為誰促歸家

[illegible]菊[illegible]

[illegible]入江[illegible]

[illegible]碧潭藍[illegible]

[illegible]死[illegible]表[illegible]

村○[illegible]○中[illegible]町[illegible]○馬入河[illegible]

雙落天祭

雙落天祭

たゝ祈河端に佛しゝ居くら男右に乃祭るハ大山寺に山の風の中
くゝて〻阿蘇山に聖武皇帝乃勅願場阿蘇山大山寺〻云
ものゝ不動明王と祭ふ所山乃わらに乃家實蒔永かと
云ものゝ先ハ後土御門院乃御宇文明年法橋命に扇谷尚
うゝてゝ先と安上杉〻云御に其法勾軍義政卿命ぜ給陽醫政
知行乃山条に立山内扇谷と上杉と作ゝ城城乃御所
と鎌倉に也いゝ安上杉に城勢法〻関東ハ皆上杉に下知
ゝ給ハ政知ハ〻の〻城と成らゝきゝ〻山内に扇谷と亡さ

ひとゝ和りて〻いゝ〻も扇谷乃家ゝに太田備中に資長入
乃道灌と云人柴ハ武刑部乃郎に地須太田備中に資
清道乃真ゝ子也若冠の時に智謀武器人に勝ゝ
和歌に達人而〻に俳諧と藥に移度ゝ合戦に一度も不
覚とゝ〻次文武二道に取ゝ柴ハ一戦叶
ゝ〻ゝ由と係〻山内に扇谷へ道灌逆ん
乃ゝと告ゝ道灌に法ハ相列に扇谷に使程に定
政同五郎胡良大軍と率〻文明十八年丙午七月道

灌退治として武列と立相列して遂に山内氏於大俣顕家同
名庫次憲房を扇谷加勢として合戦して安房
月廿六日道灌討死辞世

とかけいろいろ九
かれてなきみとれりひとつとい
ゆめ血氏ゆひとはきをの縫ろ毎ろ
書付ろとあんまとしと原三位入道ひとを
と添ひ幸れりひとせとそあめ長成宇

なり長享二年戊申二月五日山内顕定并長尾景人
帝同修理亮等扇谷定政長尾右衛入道伊玄長尾
京春入乃と妻荷糸と合戦を扇谷ろ勝ち山内六
月八月山内扇谷須ろ糸并ろる兄糸して戦ひ又山内利実
極沢ろ糸をる入河乃下也ろくとろ狂ろ濱しる毎ろ也
と云二人ろもふろ家る男狩河ハいつを乃ろ出ろと
云毎人光八甲別張ろ搗ろ濱を来ろと云又狩不ろる
入と云ろ濱ろ河ハ名ろ狩ろ也毎人ろ乃沢ろ初ろと云

風吹寄て所川若ハ相模河と云しよ建久年中稲毛三
郎重成妻女乃追福と渡し供養ハ九月彼岸
出郭ましまし給ふる所ハ此河ハ亀入り牧野御宿
るとされとも相模川とわたるためる入河と云と人なんやしさ
もしといふちよ毎ハ作くとかるまいハ幡と云村右ハ
方指ハ八幡乃社也
平塚驛茅沢より二里拾六町○花水河橋あり○山下宿
若ハ家そ所ふしん右の方ハ長者屋敷乃名あり此長者

乃姫尼と云女曽我十郎祐成ハ命もて祐成冨士野ハ狩
倉ゝて河邊三七月乃追福箱根ハ別當乃体も狩時
ゝ大磯の尼寺ハ一地と布施ハ引出もハ祐成冨
士野ゝ尼乃体ハ遺ゝる也今月髪と剃ゝ尼となる
年十九なゝ海ゝ世乃中ハ頼ハ波と云人と云れ
ゝひとゝ作地ハ云とわ人ゝ剃地ゝ作ハ人人
云ゝ濤とやたゝ云ゝ男ゝて若花山乃僧ゝ作ゝ
ゝ作ハ云

あしらぬ稀にて逢ふとてもこそ烏羽玉乃
戦のかろきはあてこそやわらきん
ときみ妨ゆきさ紫式部入宿乃庵うつし尼となる路
婦とな
な可ら猿と何ものひきんかりきれ
うしろきことのそいろかなわりけり
とる遊ひし事哀なりとや。○高麗寺山権現堂と
いはるるを唐の朶と以ふ石以法師

高麗山や麓しけるを平塚乃
里うち越てふ行あしうちう
風色されも唐うらへ春潮のうわ鐘へ通ひ遊倉へ給
汀漱河乃末比余をいてゝるや中て以蒼氷忠房
名にしをもてそうや佛らん東野り
みてい萬すゐ遠きこそしのそう
まさ鴨長明
またろうゑんよ夢そうしちらし烏羽玉丸

要路をうつれりしうちつ

○十弓坂　○富ヶ原山下　鹿石　石ヶ

大磯驛　平塚より二拾六町　馬入川　小動の

森鞠子河　かくこゝを長ひらとやすてゝ凡や右今住居よ

小餘綾乃坂　さうこゝいそかはむ

ゆきしぬしいる濱うとなつみ

こみこゝうつ又　小動ハ須倉七里方濱より勝紙へ入た乃方

よりこゝ富山わり山下ゝ　もゝ土御門内右

小動乃坂　ちうせ者を作し

夕波ふるこゝうくなり

○切通　○小坂　○四角た乃方の濱を　時之沢ゝて巻

みてゝこゝ山をこゝいはの狂そや凡也ゝさ世よりこゝ半

ゆし　近年小田原ゝ外郎　第屋と遣わしゝ平代時之

沢と云ゝとゝも或人時之沢とわるうちゑあるくゝハ

さこゝ　知り法師

ゝこゝ紀ゝ　ゝこゝれゝ

田子の浦沢より秋の花をもとめ
とゝ過て八行うとゝ沢より暗乃立居うつ風情と
ゝてよきもしゝ八下ゝ宮ゝ
近き比行乃亜相殿とゝ勅使として東ゝ下ゝ
過てゝ此所ゝ利里暗ゝ立沢乃わとゝんとゝ
和ゝ者ゝ夢ゝ見て行ゝ
ゝゝゝゝゝ彼御ゝ

とゝみ過やゝしゝ。ゝゝゝゝ村此所若ゝ二乃ゝゝ
建久乃比二度ゝ御ゝ住ゝ
音素山。四府津村河橋。梅沢右ゝ方ゝ
波。一ゝ村宮塚野
小田原驛大磯ゝゝ四里見ゝゝ箱根路ゝゝ
ゝゝ男ゝゝゝゝゝ張ゝゝゝゝ此所ゝゝゝ
ゝゝ風ゝゝゝゝゝ者ゝゝゝゝゝ
宿ゝゝゝゝゝ此所乃郡郡八義

なり上方への土産よ求度と云あるゝ故ときき事ゆへ
男女共に外郎八伯は茶ゆへあるゝ先祖の外郎
小柴左京左衛門綱乃時町奉行ハ小泉伯ゝ中御門
せゝ京都より外郎と云商人来て透頂香と賣れ法人
真ゝ名と呼て外郎中ゝ云ゝ也氣乃法き目まひ毒
中ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ息ゆめなりゝ也
風邪頭痛ゝ透頂香と云茶ハ強金達ゝ乃閑山大覚禪
師素朔の時渡ゝ茶ゆへハそゝ名方なるゝ人ゝ彼等ゝ

人皇八十八代後深草院ゝ御宇建長五年十月小柴ゝ損
守平時頼建立閑基ハ蘭溪ゝ別大覚禪師乃事なり
男又當塚ゝ西ゝ八近年乃事ゝ小田原陣落ゝ
て滅亡ゝ也ゝ天正十八年ゝ大久保七郎右衛門忠世ゝ中
ゝ子息相模守忠隣相續也後ゝ長十九年忠隣改
易後近藤石見守元和六年阿部備中守正次ゝ
寛永元年正次武州岩槻乃城ゝ移ゝ肥前守番寛
永九年ゝ播磨丹後守正勝ゝ下ゝ同家流ゝ正則丹後守義

雅三代相續義雅城治る所に於今大久保加賀守忠朝にて
此所也聞く物色御事有よく色御覧此於次に野備に
北条陣の事御存ある通説も無し事ならずされはそ
御字久光寺城ハ扇谷上杉修理大夫定政乃家臣大森
式部大輔實頼と云人築て居られ然るに明應三年甲
寅十月五日上杉定政逝去同年十二月伊勢新九郎長
氏駿州乃太守今川上総介氏親乃加勢借りて攻取り居城と
なし北条早雲是也其子左京大夫氏綱次に氏康氏政氏

直五代相續ありて九拾七年當城に居らて武威を関東
に振ひ龍登鷹揚乃ありさまなりしに人皇百七代正親
町院乃御宇天正十八年庚寅乃春豊臣秀吉卿楽り
奢を悪みて相模なる氏政左京大夫氏直父子に上洛すべく
君臣乃礼をなすべきよし使者を立られけれども北条
肯ず次秀吉卿ハ大軍を催し渠を攻むと全北条も
東八ケ國を掌に握りて数万乃軍兵旗下に集まれハ専防
戦乃術をなすと同年三月より天下乃人数小田原を

敵四方と秀吉卿ハ石垣山屏風山を本陣と定め
小牟方持ハ上方乃退ハ早河に小牟陣
作氏光小幡山塚を完盛本能宮内少輔を成小見小口部忠
則を敗紀伊を網浦等敗令其勢六千余其要ひ湯かに
蒙新及貞胤ら陣代推津集人作行憲藥田中勝助輔
政豊八千余関東より入に文塚野に松田尾張を康秀上
田上野及政廣原武敗を輔流成大曽根右馬允荒川豊前
を國法將賀伯耆を正綱其勢を万弐千余掛て行輔に

小牟陣に大友豊後を義統細川藤中を忠興塚を重督秀
作を長総同肥前を長懐當摩豊後を忠成同又十郎
忠懐壬生上総及政廣皆川山塚を廣懐等を万余其勢振
麻竹葦叟こ寄手攻に南西乃方里見左を沢義軍
脇坂中務少輔安治近江中納を秀次蒲生忠淳を氏
郷氏後脇八郎侍従を庫改義弘小早川左衛督隆景中の
方石垣山屏風山八大將本陣乎ら諸ら陣取乃方

沼池田三左衛門輝政富田信濃守信高宇喜多宰相
秀家小乃方中村式部少輔一氏堀尾帯刀吉晴大浦少
将松浦侍従羽柴下総守勝雅丑乃方幸田内蔵頭内大臣
信雄乃家人沢井左衛門保教天野周防守景俊長次郎
勘兵衛尉雄久加茂左兵助喜明長曽我部宮内少輔盛
親寅丸甫守平乃方まて　家康公御持口御家人
元備乃順松平四郎正家廣部弥次郎少輔康政松平
和泉守親宗大須賀五郎左衛門康盛奥平兵部守家昌

大久保七郎右衛門忠世本多豊後守康重酒井左衛門
家次牧野右馬允康成松平主殿助家忠大久保治右衛門
忠佐石川日向守家成本多中務大輔忠勝牧野瀋後守南
乃方福門寺小捨曲輪井伊兵部少輔直政松平周防守康重
永井乃方弾正安藤右京亮信忠三浦監物松平周防守康元仙
井河内守重忠本多佐渡守正信西尾隼人佐有次松平
丹波守康長小笠原信濃守長政松平玄蕃允家信阿部
伊豫守忠勝永井右近大夫直勝保科肥後守正光内藤

佐理を信成する力河内を信長同義保沢右衛門尉信長等を
寄せ手をおもむく井園じ付軍勢と分けて小田原の
持城をもと攻らるる武田左陸奥小田原城八月四日
猛勢取かけられ六月二日井伊兵部少輔直政松平周防守康
重篠曲輪と攻破り同廿六日秀吉卿乃下知として佐軍浜
砲と發し城中と切と七月五日左京大夫氏直城を出て
羽柴下総守の陣に来て降伏謝を乞六日井伊兵部少輔
直政本多中務大輔忠勝榊原式部大輔康政三人作と

なりて小田原城と信長卿より十日秀吉卿乃命より
相模守氏政陸奥守氏照切腹を十二日氏直八命を助
る所ふしぎに八ふれなりよしなき長坂弾正を
めとらしもなきなくて五人を殺どうらけり

譯解紀卷之一終